

＜研究ノート＞

仏女性, Alice Million Milliat (1884～1957) が 「女性スポーツ界」に果たした足跡

岡尾 恵市

＜はじめに＞

イギリスの女性スポーツ社会学者, Dr. Jennifer A. Hargreaves は, その自著『Sporting Females』の冒頭で「もし, あなたが図書館に行きスポーツの書を紐解いた時, その大半が圧倒的に男性に関するものであり, 大学図書館のスポーツ史やスポーツ社会学の著書の大多数は男性を基準としたものが占めている。¹⁾……」と述べている。「History」の語が「His・Story」に由来するとするなら「Herstory=Her・Story」の名のもとに女性のスポーツの歴史を書き記すべきだとする皮肉な女性スポーツ史研究者たちが存在する現今,²⁾ スポーツ史の分野でも「女性スポーツ発展に関する歴史研究」の更なる深化が急がれる。

1896年の「第1回アテネ五輪」に出場した女性選手は皆無, 1900年の「第2回パリ五輪」に非公式種目ながらテニスとゴルフに出場した女性選手はわずか19名(1.4%)であったものが,³⁾ 近年の夏・冬季オリンピックでは男女選手の比率が6対4, 女性出場選手数は夏季には3600名, 冬季でも1200名を超えてきているにもかかわらず,⁴⁾ 世界レベルのみならず日本においても「女性スポーツ史」, とりわけ20世紀初頭に「女性によるスポーツ活動」が世界各地で行なわれはじめて以降, 黎明・勃興期の記録を克明に記述した著書・論文・文献はそれほど多くない。

とくに世界の「女性スポーツ」の黎明期ともいえる第一次大戦前の1911年に, フランス国内の女性を中心としたスポーツ・クラブ(“Femina Sport”)に参画して活動し, 17年に国内女性の競技連盟(Fédération des Sociétés Féminine de Sportive France, 以下「FSFSF」と略す)を組織し, 後述するように大戦後の1921年10月31日, 国際的な「女性スポーツ」の組織である「国際女性スポーツ連盟(Fédération Sportive Féminine Internationale, 以下「FSFI」と略す)」を興して永らく会長職をつとめ, 当時男性が中心となって支配していた組織である「国際オリンピック委員会(International Olympic Committee, 以下「IOC」と略す)」と堂々と渉り合い, 女性にも正式にオリンピック参加への機会が保障されて然るべきだとする権利を主張し, 「女性スポーツ」が今日の様相を呈する地歩を築いた中心人物であるフランス女性, Alice Million Milliat (1884～1957)の業績について, 彼女が母国のフランスの国内外で活躍した1917年以降30年代中期までの記録は, 当時の著書や諸会議の議事録, 彼女の言行集と近年になって論文や文献の形で明らかにされては

えるが、もはや残虐行為を恐れる必要はない。わが国の最も狂信的な共和主義者でも靴屋のシモンよりましではないだろうか。（……）フランスは最初に病から治るだろう。ポワトゥ男爵の輩がプロス裁判長の手紙を味わうのは、まずフランスにおいてであろう。¹⁵⁾

アメリカ化は避けられないとしても、フランスがアメリカの新教徒的陰鬱さと大衆デモクラシーの愚昧さを克服し、旧体制の陽気さを取り戻すことをスタンダールは願っている。「不確かな仮定」という条件付だが、ともあれこれが、最も楽観的なときに彼が夢見た未来のフランスの姿だった。ここでも、自然状態や国家の解体が問題外であることは言うまでもない。

注

- 1) Stendhal, *Rome, Naples et Florence en 1817*, dans *Voyages en Italie*, Gallimard, Bibliothèque de la Pléiade, 1973, p. 43. 以下、『1817年のローマ、ナポリ、フィレンツェ』（1817年版、1826年版）、『1818年のイタリア』についてはこの版を使用し、本文中に頁字数を記す。
- 2) Stendhal, *De l'Amour*, éd. H. Martineau, Garnier Frères, Classiques Garnier, 1959, p. 3.
- 3) Stendhal, *Mémoires d'un touriste*, dans *Voyages en France*, Gallimard, Pléiade, 1992, pp. 46-47.
- 4) *Ibid.*, p. 52.
- 5) *Ibid.*, pp. 125-126, 138.
- 6) *Ibid.*, p. 9.
- 7) *Ibid.*, p. 18.
- 8) *Ibid.*, p. 55.
- 9) *Ibid.*, pp. 230-231.
- 10) *Ibid.*, pp. 229-230.
- 11) *Ibid.*, p. 466.
- 12) *Ibid.*, p. 81.
- 13) *Ibid.*, p. 121.
- 14) スタンダールの旧体制ノスタルジーについては、*Stendhal et son penchant aristocratique : la nostalgie d'un monde jamais révolu* と題して、*L'Année Stendhal* numéro 5 に発表予定。
- 15) Stendhal, *La comédie est impossible en 1836*, dans *Mélanges*, t. II, *Œuvres complètes*, Genève, Cercle du Bibliophile, 1970, t. XLVI, pp. 265-278.

(Shigeru Shimokawa, 本学文学部教授)

きているもの⁵⁾、彼女自身が記した自伝等がほとんど見当たらないこともあって、その生誕期や少女期から結婚期に至る様子、結婚相手の男性の様子、私生活や住居、および「FSFI」が「IOC」に「吸収統合⁶⁾」された後、役割を終えて表舞台から去り、逝去に至るまでの彼女の生活ぶりなどについて、わが国ではほとんど紹介されてきていない。

21世紀に入った今日、今後加速的に飛躍・発展することが予想される「女性スポーツ」の進むべき方向を定めようと、1990年代に入って世界的レベルでは「IOC」が「スポーツと女性作業部会 (Women and Sport Working Group⁷⁾)」を設置して、女性のスポーツ問題に正面から取り組みをはじめるとともに、わが国においても2001年6月、大阪でようやく「第1回アジア女性スポーツ会議」が開催され、その議論が緒についたばかりであることに鑑み、今報では、今後の幼児から高齢者にいたる女性大衆の実践するスポーツをはじめとして世界のトップ水準のアスリートが展開する女性の競技スポーツに至るまでの「女性スポーツ」の進むべき方向を議論する出発点として、現段階で明らかにされている諸資料をもとに、改めてミリアが活躍した時代のスポーツ状況の描写をしながら、彼女が「女性スポーツ界」に果たした足跡を明らかにしておきたい。

1. その生い立ちから“Femina Sport”の会長に就任するまで

1910年代から36年8月10～11日、「第11回五輪」終了後、ベルリンにおける「国際陸上競技連盟 (International Amateur Athletic Federation, 以下「IAAF」と略す⁸⁾)」の第13回総会で、「IAAF」が女性陸上競技の統括を決議するまでの間のミリアのスポーツ界における華々しい言動の記録は、いくつかの著書・論文でも紹介されてはきている⁹⁾。彼女は19世紀末以来の近代スポーツ界では「IOC」を組織し、「近代オリンピック大会」を興したピエール・ド・クーベルタン男爵 (Baron Pierre de Coubertin) と並び称される活動をした人物でありながら、当時の「女性のスポーツ界」に対する評価が低かったからか、表舞台に立つまでの生活や言行は、あまり紹介されていないばかりか、内外の『百科辞典』『女性人名録』『西洋人名辞典』等にも記載はなく最近まではその生誕期さえ不明なままであった。

しかし、70年代以降、ミリアについては『Journal of Sport History』(Vol. 4 No 1: 1977年) 掲載の「The Pioneering Role of madame Alice Milliat and the FSFI in Establishing International Track and Field Competition for Women」[Mary H. Leigh (Brockport, 州立大)・Térese M. Bomin (Columbus, Ohio 州立大) 著] の論文¹⁰⁾、および同誌掲載の「Women's Participation in Olympic Games 1900-1926」¹¹⁾ [Sheola Mitchell (Ottawa) 著]、『体育の科学』(Vol. 34, 1984年8月号) 掲載の「オリンピックと女子スポーツ」¹²⁾ [萩原美代子 (文化女子大学)]、1990年代に入って、世界の女性スポーツの高揚と、関心の高まりのなか、『Women's Sports—a History—』[Allenn Guttmann 著, Columbia University Press: 1991年]¹³⁾、『Olympic Journal 誌』(2000年2～3月号 XXVI-31) に掲載された「Alice Milliat and the Women's Games」¹⁴⁾ [Ghsiaine Quinter 著 (International Relations Section National Institute for Sport and Physical Education=INSEP 主任)] 著の論文が散見される程度であったが、2001年になって『世界女性スポーツ百科 (International Encyclopedia of Women and Sports)』(全3巻1428頁) [Karen Christensen, Allen Guttmann, Gertrude Pfister 編, Macmillan Reference: USA]、のなかで編者のひとりである Guttmann 氏がミリアに関する項を起して彼女の活動の概略を記し、ようやく彼女の若き日の像が浮かび上がって

きた。¹⁵⁾

ミリアは1884年、フランス・ブルターニュ地方、ナントで生まれた。¹⁶⁾ 彼女はケルトの血を引く独立心の旺盛なフランス女性で、1911年にピエール・パイセ (Pierre Payssé) がパリで創設し、今日もお活動を続けている「フェミナ・スポーツ」の一員となり、上流階級の女性たちの間にスポーツを広めるためのスポーツ・クラブのメンバーとして活躍をはじめた。¹⁷⁾

この「フェミナ・スポーツ」というクラブは、ミリアと同時代に生きたアメリカの高名な舞踊家、イサドラ・ダンカン (Isadora Duncan) の弟子たちの指導によるダンスと各種スポーツを実践するためのクラブであった。20世紀初頭には、陸上競技・水泳・バスケットボール・サッカー・自転車のように、それまで男性に限って行なうのが当然とされていたスポーツの各種目に、女性が参入しようとしたが男性役員たちに拒否されたので、女性たち自身がスポーツのクラブを結成したもののひとつである。¹⁸⁾

このクラブはまた、17年7月に「第1回フランス陸上競技選手権大会」を主催・運営したことで有名である。この大会に出場した多くの選手たちには、女性がスポーツに勤しむなどとは考えられもしなかった時代に、家族内からも「家名を汚した」と云わんばかりの罵声を浴びせられるなか、砲丸投に優勝したグーロウ・モリス選手 (Violette Gouraud-Moriss) は、記録を出すために胸部をあらわにして競技をしたために、非難が集中したとのエピソードが伝えられている。¹⁹⁾

さらにこのクラブは翌年の18年4月28日には女性サッカーの大会を主催し、26年から32年までは選手権を獲得するチームを有していた。また、22年にはクラブの勇敢な女性たちによって実験的にラグビー (フランスでは皮のヘッドギアを付けて行なうことから“barrette”と呼ばれていた) に挑戦したが、これは早計だというので中止のやむなきに至り、「女性ラグビー連盟」が創設される70年までは行なわれないままであった。²⁰⁾

また、同クラブに遅れること2年、15年には男性のギュスタフ・ド・ラフルテ (Gustave de Lafreté) が、古代ギリシア、プラトン (Plato) の最後の名著、『法律』の巻8の第1章～第4章に記述されている軍備と女性の身体訓練の必要性に関連して、紀元前337年にプラトン自身がアテネ郊外に創設した学園名にちなんで「アカデミア (Acadéia)」という名のクラブを創設した。²¹⁾ このクラブは、大戦でドイツ軍と戦うフランスの男性とともに「銃後の守り」を任せられ、フランス各地の街を防衛する女性の訓練のために創られたもので、創設の年の5月1日にはこのクラブは、はじめての女性のための「陸上競技大会」をブランション競技場 (Stade Brançon) で主催した。²²⁾

さて、少女時代のミリアは、スポーツや学校で果たされる体操 (gymnastic) には心底からの興味を持っていたわけではなかったが、各種スポーツの大会に参加しはじめてからスポーツに魅入られていった。その後、彼女はボート漕ぎ (rowing) に関心を示し、指定された時間内に小型ボート (skiff) でフランス南部のカルカソンヌ (Carcassonne) からナルボンヌ (Narbonne) の地を経て地中海に注ぐオード川 (Audoux) を数十キロにわたって漕ぎ切る長距離ボート・レースで栄賞を受けた最初の女性となり本格的にスポーツとの関わりを持つようになって、15年には「フェミナ・スポーツ」の会長に就任した。²³⁾



(ボート漕ぎに勤しむ若き日のミリア)
【『Olympic Journal 誌』(2000年2~3月号
XXVI-31) p. 28 より】

2. 「フェミナ・スポーツ」の会長を経て 国内女性スポーツ組織の会長に就任するまで

この時期になるとフランス各地において女性陸上競技に関心を示す女性の数は増え、クラブ数も順調に増加して大会も開催されていた。こうした気運の下、17年7月には「フェミナ・スポーツ」は競技成績の向上と大衆からの熱狂的な支持を受けて、ミリアの絶大な努力により、上述のように「第1回フランス陸上競技選手権大会」を組織し運営した。このことを契機にミリアの奔走もあって同年

には3つのクラブを組織してフランスの女性の連盟の創設に漕ぎつけた。²⁴⁾

17年12月までは女性スポーツのためのクラブの役職は男性がつとめていたが、ミリアはこの「連盟」の財務担当の役員に選任された。²⁵⁾その後、彼女は18年6月に情熱と運営手腕を乞われ、この「FSFSF」の専務理事(Général Secretariat)に選出され、19年3月10日には満場一致で会長に就任した。²⁶⁾その後、この組織はひとりミリアだけでなく、シュザン・リブラー嬢(Mlles. Suzanne Liébrard)、テイレーズ・ブリュレ嬢(Thérèse Brulé)、ジェルメヌ・ドラピエール嬢(Mlle. Germaine Delapierre)ら、当時選手として活躍した女性たちも組織運営を支え、その後ドラピエール嬢のように結婚後はシャピユイ夫人(Mme. Chapuis)として、後述の「FSFI」の専務理事に就任してミリアの片腕となった女性を筆頭に、女性たちが主導権を握って運営した。²⁷⁾

ミリアのリーダーシップの下、この「FSFSF」は女性の陸上競技大会だけでなく陸上ホッケー、バスケットボール、サッカー、水泳等、多くのスポーツ種目の国内選手権大会を主催し、20年には、それまで男性が中心となって支配していた女性の各スポーツ競技連盟も、すべて女性のみによる組織運営を行なうことになり、4チームが参加してイギリスで行なわれた「第1回国際女性サッカー大会」にフランス・チームを送り出すに至った。²⁸⁾

この間、ミリアは常にその先頭に立ち、その組織化と大会開催の準備に邁進した。彼女は若くして結婚したが夫に先立たれ、子どもがなく再婚しないまま若いうちから未亡人となったこともあって、組織活動に費やす時間と気力および金銭的余裕(資産)にも恵まれ、自らスポーツをも熱心に行なった。彼女はイギリスとアメリカに住んでいた2人の姉妹がそうであったように、フェミニストであり、フランス女性のための「参政権運動(suffragette)」にも精力的に活動したが、単刀直入に発言したりせず、いわゆる政治活動の闘士(militant)ではなかった。²⁹⁾

しかし、彼女を「参政権運動」に投じさせたのは、「女性スポーツ」が男性社会のなかで承認されたり理解されるためには、必要な活動だと信じていたのではないかと推測される。それは34年に『自立する女性(Independent Women)』という女性誌の記者のインタビューに対する発言のなかに読み取ることができる。

彼女は「各種の女性スポーツに関して、わが国ではスポーツの場が不足しているというハンデがあります。私たちには投票権がないので、自分たちの要求を大衆のものとし、正当な居場所を示すための圧力をかける事はできません。私は常々少女たちに、こうした活動をしているの

も、フランスの女性がスポーツの分野で他の国々とともにスポーツの場を持つことができるように、投票権を行使することもそのひとつだと話しているのです」と語り、女性のスポーツ振興のために「参政権運動」をしているのだと本心を明かしている³⁰⁾。

なお、ミリアのその後の努力によって、この「FSFSF」は25年にはフランス女性陸上競技のクラブ数は、400を超えるまでに組織拡大がなされたが、後述するように21年10月に「FSFI」を立ち上げ、そちらの活動に精力を傾注するために、25年に同会の会長職を辞した。しかしこの組織のその後の活動の様子や後任の会長等の役職については、記録された資料が未だに見当たらず、闇の中にある³¹⁾。

3. 「国際女性スポーツ連盟」結成前夜の欧米の女性スポーツの様子

ミリアがフランス国内の「女性スポーツ」の組織を固め、各種競技会の運営に奔走している頃、男性を中心とした世界の「オリンピック運動」にも刺激を受けたこともあって、欧米を中心として日本でも「女性スポーツ」の組織が立ち上がっていった。以下、おもな国の状況を概観する。

17年には「オーストリア陸上競技連盟（Osterreichischer Leichtathletik Verband）」がウイーンに「ドナウ女性水泳クラブ（Danubia Women's Swimming Club）」に女性陸上競技部門を創ることを決定し、18年7月27日には「第1回オーストリア陸上競技選手権大会」を開催、18年にはこのクラブがハンガリーのブタペストに選手団を派遣、19年にはドイツのミュンヘン³²⁾の女性陸上競技大会に参加するなど欧州の隣接国家間の競技会の交流が開始されてきていた。

スエーデンでも18年に体操の指導者のリング（Pehr Henrik Ling）が出て以来、国民の体育・スポーツへの関心が深まるなか、13年にはイエテボリ（Gothenburg）ではすでに女生徒のための「体力章検定（a Sport Badge for Women）」を実施し、その中に含まれる陸上競技種目の能力測定のための記録会が各地で開催されていた³³⁾。

また、イギリスでも、1880年に創設された男性の組織である「アマチュア陸上競技連盟（Amateur Athletic Association=AAA）」の活動が約40年間の経験を積むなかで、これに刺激されて18年には女性独自のチームをつくって、スタンフォードブリッジ競技場（Stamfordbridge Stadium）での男性の陸上競技大会の中のプログラムに加わるという形でリレーに参加する女性選手が現れてきていた。19年には「公務員選手権大会（Inter-Services Championships）」に女性の種目として440Yリレーが設定されて行なわれ、女性のための「北部女性選手権大会（Northern Counties Ladies Championships）」が開催されてきており³⁴⁾、21年以来、「全英大学女性陸上競技連盟（the Women's Inter-University Athletic Board=23年に結成）」は未結成ながらも女子大学生の大会は開かれてきていた³⁵⁾。

その他、イギリス各地では地方でクラブによる女性大会が開かれ、例えばブレントウッド（Brentwood）においてマナーパーク AC（Manor Park AC）の R. E. トンプソン嬢（Tompson）が「エセックスの100Y競走大会」で当時の世界記録を破る11秒6の好記録で走るなどに見られるように³⁶⁾、女性競技への参加者が増加し活況を呈していたことに伴って、女性独自の連盟の創設が急がれ、22年初頭には「英国女性陸上競技連盟（Women's Amateur Athletic Association, 以下「WAAA」と略す）」³⁷⁾が設立された。この「WAAA」は、イギリス各地の大学や大企業はもちろん一般市民の個人によって組織された各クラブが賛同するとともに、各地にある男性中心のクラ

ブに「女性部」が出来、「WAAA」に加盟したので、ホーク卿 (Load Hawke) を会長として短期間の間に23,000人もの会員を擁する一大組織へと成長を遂げており、①イギリスにおける女性陸上競技の調整と統制者である、②女性競技者が最適の環境と条件で競技できる状態を確保する、③正確なイギリス女性の記録を受理・登録する、④適正な競技種目を選択し、正しいトレーニングに関する助言を行なう、⑤イギリス国民の強健な身体づくりを目指して活動する、ことを目的として活動をはじめたが³⁸⁾、21世紀の現在もなお、その活動を続けている女性自身による陸上競技の組織である。

一方、ドイツでは1904年以降、女性の陸上競技会が行なわれてきていたが、大戦の敗戦国であった事情もあって、19年以後になって「ドイツ陸上競技連盟 (Deutsche Sportbehörde für Leichtathletik)」に女性部門を設けて活動を開始したことが契機となって、はじめ100mと400mRだけであった大会に以後、走幅跳、砲丸投が加わって本格的な競技会の形式が整えられるようになった。³⁹⁾

アメリカでは、1895年11月にニューヨーク州のポキプシーにあるヴァエサー・カレッジ (Vassar College, Poughkeepsie, New York) における「フィールド・デイ (Field Day)」が開催されて以降、体育教育とスポーツの両面から各種学校を中心に女性スポーツの大会が盛んとなった。⁴⁰⁾ たえば陸上競技に関していえば、大戦を挟んだ時期の大会は、カレッジ等の学校単位での開催であったが、15年にはコネチカット州ワシントンのウイーカム・ライズ女子校のシュアード博士 (Dr. Harry Eaton Stewart) の尽力で女性陸上競技大会の支援が行なわれるなか、18年には全国規模での組織である「全米陸上競技委員会 (The National Women's Track and Field Committee)」の第1回総会がニューヨークで開催され、競技や組織の諸規則が確認された。⁴¹⁾ 22年12月には、アメリカ商務長官 [後に第31代アメリカ大統領] フーバーの夫人 (Mrs. Herbert C. Hoover) を局長とする「全米アマチュア競技連盟女性部 (National Amateur Athletic Federation Women's Division)」を結成、1923年1月に「全米アマチュア競技連盟 (Amateur Athletic Union)」は女性の陸上競技種目への参加の可否を巡って議論を重ねた結果、水泳や体操競技、ハンドボールとともに選手登録を認めることにして、同年9月29日にニュージャージー州のニューアークにあるウイーキュアヒック公園 (Weequahic Park, Newark, New Jersey) において11種目からなる「第1回全米女性陸上競技選手権大会」を開催し、主として学生や東部地区の12のクラブ員が参加してきた。⁴²⁾

この時期、欧米に比べて立ち遅れていた日本でも、当時ようやく女性独自のスポーツ組織が確立し、大会が行なわれはじめた。22年5月27日には東京キリスト教青年会主催で「女子連合運動会」が御茶ノ水東京女高師の校庭で開かれ、195名が参加。同年10月17日には「第2回連合競技会」が東京陸軍戸山学校で開催、同日には大阪毎日新聞社岡山通信部主催の「第1回岡山県女子体育大会」が行なわれた。さらに同年11月12日に大日本体育同志会主催・東京朝日新聞社後援の「第1回全日本女子選手権陸上競技大会」が315名の参加で行なわれ、同日には健母会主催・大阪時事新報社後援の「大阪府女学校運動会」が兵庫県鳴尾運動場で開催されるなど、大会は全国各地で野火のように広がっていった。⁴³⁾

4. 欧州内国際交流スポーツ大会の開催から「国際女性スポーツ連盟」の結成まで

ミリアの所属していた「フェミナ・スポーツ」クラブはこの時期から女性のための国際的な陸

上競技の大会を開くため、長期間にわたって「IOC」を説得してその準備をはじめていた。19年には「FSFSF」は「IOC」に対して通常のオリンピック大会の陸上競技に種目を設け、女性選手の参加を要求する提案をしたが、⁴⁴⁾男性が中心的に支配していた「IOC」はこれに同意せず、女性選手の陸上競技への参加が実現するのはクーベルタンが会長を退いた25年以降に議論が進み、28年の「第9回アムステルダム五輪」になってからのことであったのは衆知の事実である。

女性が出場できるスポーツ競技大会開催を望む声は野火のように広がってきたことを受けて動き出したのは、モナコの男性会員に限定された「国際スポーツ・クラブ (International Sporting Club)」の会長でフランス・ボウルジャー (Beaulieu) の市長であったブラング氏 (Camille Blanc) であった。彼は小侯国であるリヴィエラ (Riviera) に上流階級のための女性スポーツ競技者 (femmes sportives) が集う理想的な街にしようとの構想をたて、8人の男性からなる組織委員会を立ち上げ「第1回女性オリンピック (Olympiades Féminines)」開催の招待状を各国に送り、21年5月25日、1896年にイギリスの上流階級の人々のために作られた「クレール射撃場 (Stand du Tir)」の土地を使って、フランス・イギリス・ノルウェー・イタリア・スイスの「5か国対抗」の形式で、女性の陸上競技およびバスケット・ボールのリーグ戦を約300名の選手を集めて開催した。見物の観衆は大変熱心で、閉会式にはポパード師 (Irene Popard) と彼女のダンスの教え子たちが「ハーモニック体操 (Gymnastique harmonique)」⁴⁵⁾を演じた。

この日の様子はフランスの『スポーツの鏡 (Le Miroir des Sports)』『屋外生活 (Vie au Grand Air)』『リヴィエラ写真評論 (Revue de la Riviera Illustrée)』などの各紙がこの大会を取材し報道した。⁴⁶⁾

この大会が盛会裏に終わったこともあって、イギリス・チームはこの遠征の主力となったロンドンのリージェント技術専門学校 (Regent Street Polytechnic) の選手を中心に帰国後、「ロンドン・オリンピック陸上競技クラブ」を立ち上げた。さらにこの年、10月30日にはイギリスの女性チームはパリに遠征し、「英仏女性対抗陸上競技大会」(8種目)を行ない、すでに27歳になっていたラインズ選手 (Mary Lines) は、当時、極めて珍しい「スパイク・シューズ」を履いて100Yに11秒8という世界記録を樹立して公認されるなどの成果を挙げ、48対37でイギリス・チームが勝利して、⁴⁷⁾盛況のうちに終了した。

この2つの大会の成功を見て取ったミリアは、大会の翌日の10月31日にパリ・イタリア通りの「プーセット会館 (Salle Pousset)」に、6カ国 (イギリス・アメリカ・フランス・チェコスロバキア・イタリア・スペイン) の代表を招集し、「設立総会」を開いて全員一致の合意を見て、女性スポーツにとって歴史的な組織、「FSFI」を結成・創設して、⁴⁸⁾自らが会長に就任した。

この総会では、①組織の名称を「国際女性スポーツ連盟 (FSFI)」と呼ぶ世界的な組織とする、②各国にある「女性の競技連盟」の円滑な調整をする、③規約の制定と各国グループの組織化と管理を行なう、④個人および団体競技の技術的規則の統一を計る、⑤「ヤード・マイル制」による競技を実施する、⑥「メーター制」と「ヤード・マイル制」による女性世界記録の唯一の「公認組織」としての権利をもつ、⁴⁹⁾こと等を確認した。

5. 組織確立から「世界女性オリンピック大会」の開催へ

21年のモンテ・カルロの大会が成功裏に終わったことを受けて、前述のブラング氏が組織の中



(会長職時代のミリア)

[[Athletics of Today for Women] F. A. M. Webster 著, 1930年表紙裏の写真より]

心となって、フランスの体育委員会のパテイ氏(Henri Pathé)を名誉会長に据えて、翌22年4月15日~23日には再度モンテ・カルロで「国際女性大会(Jeux Internationaux Féminins)」を開催した。この大会はバスケットボールと2つのリレーを含む13種目に及ぶ本格的な陸上競技大会のほか、スエーデンやオランダが上位を占めた水泳が行なわれ、前年参加のイギリス・チェコスロバキア・フランス・イタリアにベルギー・デンマーク・スイス加えて、7カ国、約300名の参加があり、前年同様に閉会式にはポバード氏率いる体操団の演技が彩りを添えた。⁵⁰⁾

さらにこの年の8月18日、ミリアはパリのリシャリア通り100番地の会館で「第2回FSFI総会」を招集し、「第1回女性オリンピック(Olympiques Féminines=The First Women's Modern Olympic Games)」を2日後に開催することを決定した。この会議にはアメリカ・イギリス・フランス・チェコスロバキア・イタリア・スイスとギリシアが出席した。⁵¹⁾この「総会」では、①アマチュアリズムの定義を巡っての討議、

②記録を検証し、公認の手続きについて検討する、③「女性オリンピック大会」を4年ごとに開催する、④「第2回大会」を26年に開催する、こと等を決定した。⁵²⁾

こうしてミリアたちが準備してきた「第1回女性オリンピック」は、8月20日(日)パリのペルシャン競技場(Le Stade-Pershing)で行なわれたが、アメリカは「全米体育協会委員会女性部会(the Committee on Women's Athletics of the American Physical Education Association)」の妨害にもかかわらず20名の選手を派遣してきたことなどもあり、女性の演ずる競技の物珍しさもあって興味津々で見物にやってきた20,000名がスタンドを埋めた。開会式では「オリンピック大会」を模して、まず各国の国旗を先頭に自国の国旗をあしらったエンブレムをつけたユニフォーム姿の選手団の華やかな入場行進を行ない、陸上競技では1000m競走を含む11種目を実施した。大会は個人の表彰とともに入賞者に得点を与え、国別対抗の形式を採用した。60mと1000mの2種目に世界新記録が誕生し、最終成績では、多くの種目優勝をさらったイギリスが50点で総合優勝、アメリカ2位、フランスが3位となり、盛会裏に終了した。⁵⁴⁾

なお、この大会の名称に「オリンピック」の名を冠したこと、開会式に「入場行進」を行なったことは、ミリアらを中心とする「FSFI」が、明らかに組織として男性中心の「近代オリンピック大会」の陸上競技種目に女性選手が出場拒否されたことに対する「抗議行動」であったと思われる。⁵⁵⁾

6. ミリアの活躍による組織の拡大の努力と成果

この大会一週間後の8月27日には、ロンドンの「オリンピック陸上クラブ」「ブラッセル女性スポーツクラブ」パリの「フェミナ・クラブ」による「3クラブ対抗」(8種目)が、ブラッセル市デューデンのバルク競技場(Stade du Parc)で開催された。⁵⁶⁾この年の夏の一連の競技会が契機

となって、すでに国内に「WAAA」を組織していたイギリスでは、9月に入って「第1回全英女性陸上競技選手大会（English Women's Championships）」を開催するなど、欧州各国にはなお一層女性独自の大会が開かれる気運が上昇してきた。

それまで「FSFI」には、フランス、イギリス、アメリカ、リトアニア、チェコ・スロバキア、ユーゴスラビア、ベルギー、イタリア、スイスが加盟し、創設時より加盟国は増えたものの、ミリアの努力にもかかわらず、すでに18年から陸上競技の大会を開催していたオーストリアはじめ、フィンランド、スウェーデン、ポーランド、ルーマニア、エストニア、ラトビア、オランダの欧州各国と南アフリカは未加盟状態であり、第一次世界大戦の敗戦国であるドイツの処遇に関して、22年の「第2回FSFI総会」で討議されたものの「時期早尚」との意見が出て、ドイツの加盟は見送りとなった。⁵⁷⁾

23年4月になって、過去2回、モンテカルロで「第3回国際女性競技大会」（陸上競技9種目とバスケットボール）が、イギリス、フランスなど6カ国の参加で開かれた。⁵⁸⁾一方、前述したようにアメリカでも9月に「第1回全米女性陸上競技選手権大会（The 1st Women's National Track and Field Championships）」が開かれたが、欧州各国同様、女性が全国的な水準での競技大会を開催したり参加することに関して、社会的地位のある男性の側から批判的な意見も多く、大会運営は困難を極めていた。⁵⁹⁾

7. 23年「第6回IAAF臨時総会」と24年「第7回IAAF」総会における女性陸上競技のあり方を巡っての論議

23年に「IAAF臨時総会」がパリで開催されたが、ミリアらの努力で実績を積んできた「FSFI」の行動力に影響を受けた「IAAF」は、女性陸上競技の扱いに関して、はじめて議題に取り上げた討議した。この時、他の諸議題は横におかれ、この問題で会員から様々な意見が百出した。長時間の討議の後に、①女性の競技会を受け入れること、②多くの条件付きで支配下におさめること、③「FSFI」と緊密な関係を結んでいくこと、⁶⁰⁾を決定した。

さらに「IAAF」は、「第8回パリ五輪」開催直前の24年7月に再度「総会」を開催し、「IAAF」自体が女性のための「競技規則」を早急に設定して、「FSFI」を「IAAF」の傘下に入れて女性の競技全般を把握することを決議したが、「パリ五輪」の陸上競技種目への女性の出場は見送られた。

8. 26年の「第2回女性オリンピック」に向けた準備

この「総会」を受け、さらに組織の拡充をはかって「第2回女性オリンピック大会」を開催するための準備に取りかかるため、ミリアは24年7月31日にパリ・モンマルトル街17番地の会館に「第3回FSFI総会」を招集した。ベルギー、カナダ、フランス、イギリス、イタリア、リトアニア、スイス、チェコ・スロバキア、ユーゴ・スラビアの代表が出席し、新たにベルギー、カナダ、リトアニア、ユーゴ・スラビアの4カ国の加盟が承認されたが、フィンランドの加盟は衆議が一致せず見送りとなった。また、イタリアが大戦の敗戦国であるドイツの加盟について積極的に働いたが、ここではドイツが19年に結成された「国際連盟（the League of Nations）」に正式加盟が許されれば加盟できると決めた。⁶¹⁾

さらにこの「総会」では、「FSFI」の加盟国が増加するにしたがって、毎年定期的に会議を招集することが次第に困難となり、①これ以降は2年毎に総会を開くこと、②「女性オリンピック」の将来問題について議論すること、③ベルギー代表が26年の「第2回大会」をブラッセル市で開催すること、④チェコ代表から30年の「第3回大会」はプラハ市で開催することが提案され、イギリスなどの賛成を得て、この議案は同意された。⁶²⁾ さらに、⑤大会は2日間で行なう、⑥各国は1種目2名と2名の補欠をエントリーできる、との決定を行なったものの、第2回大会の具体的な実施種目等は合意されず、25年中に「国際委員会」を開き、決定することとした。⁶³⁾

24年7月5日から、パリで「第8回五輪」が開催されたが、男性の参加数が2956名にのぼっていたにもかかわらず、女性の公式種目参加は競泳・飛込、フェンシング、テニス、ヨットに限定されてわずか135名が出場したにとどまり、前述のように陸上競技には参加が認められなかった。⁶⁴⁾

しかし、イギリスでは1981年のアカデミー賞受賞映画『炎のランナー (Chariots of Fire)』の主人公となった100mのアブラハムス (Harold・Abrahams)、400mのリッデル (Eric Liddell) らの金メダリスト以下の男性陸上競技陣の大活躍で、国内では陸上競技ブームが起こり、「パリ五輪」終了直後の8月4日には、それまでモンテカルロで行なわれていた女性の「6か国対抗大会」をロンドン・スタンフォードブリッジ競技場に移して開催され、25,000名の大観衆を集めて、250m・1000mなど7種目に世界新記録が誕生するなどして大盛況のうちに終了した。⁶⁵⁾

スポーツの盛んなスウェーデンでも25年、女性陸上競技連盟が結成されるとともに「FSFI」への加盟が認められて9月にはイギリス女性選手団を迎えて、イエテボリ市とファルケンボリ市で対抗戦を行ない盛会裏に大会を終了させた。この実績は26年の「第2回女性オリンピック大会」に活かされることとなる。⁶⁶⁾

9. 「第8回 IAAF 総会」における女性種目をめぐる論議と「第2回女性オリンピック大会」の開催

「IOC」は26年5月2日7日、「第24回総会」をポルトガルの首都リスボン市 (Lisbon) で開催し、それまで「IAAF」で議論してきた女性の陸上競技種目をオリンピックに導入するという案について、当時の「IAAF」会長のエドストローム氏 (Sigfrid Edoström) が提案し、承認した。ミリアの主導による「女性スポーツ」が実績を積み上げてきたこと、世論の動向が変化してきたこともあろうが、それまで30年間「IOC」会長職に君臨し (在任1896年~25年)、頑なに「女性スポーツ」、とりわけ女性陸上競技のオリンピック参加に反対してきたクベルタン男爵が25年の「総会」を機会に引退したことも、方針変換が行なわれた主因だと考えられる。

さらに同年8月5日から標記の「IAAF 総会」がオランダ・ハーグ (Hague) で開催され、以前にも増して「オリンピックにおける女性陸上競技種目の実施」を巡って議論が集中した。ここでの論議の内容は、前出の『Athletics of Today for Wemen』と、当時この書を翻訳して紹介した雑誌『アスレックス』巻7-7号 (29年7月号) に掲載された当時の大日本體育協會々長であった岸清一著「国際陸上競技聯盟總會議事録」⁶⁷⁾、および拙著「近代女子陸上競技成立の過程」⁶⁸⁾ に詳しいので、ここでは省略するが、会長のエドストローム氏の「すべての問題はこの連盟が“男性のための組織”であるか、男女を包含する組織として存在するかによって決まる」と発言したことを契機に議論は始まり、スウェーデンのエクランド氏 (Eklund)、の「28年のアムステル

ダム五輪に女性陸上競技を“試験的”に実施に賛成」の発言のほか、イギリスバーナード氏（Bernard）から「参加絶対反対論」など各国代表が賛否を巡って激しい論戦を展開した結果、エクランド氏の示す「特別委員会」の示す修正案に関して、オーストリア、ベルギー、フランス、ドイツ、ギリシア、オランダ、ノルウェー、ポーランド、南アフリカ、スウェーデン、スイス、アメリカの12か国は賛成、オーストラリア、フィンランド、イギリス、ハンガリー、アイルランドの5か国はあくまでも反対した。開票の結果「5種目に限って実施する」という案が同意されるとともに、女性の競技を管理する「特別委員会」が設立されることになった。⁶⁹⁾

一方、「FSFI」は「IAAF」の議論を受けて、26年7月27日～29日に、ミリアの主導で後述の「第2回女性オリンピック」開催中のスウェーデンのイエテボリ市の園芸協会会館（Horticultural Societies' Gardens）において「第4回FSFI総会」を招集し、日本を含めた17か国代表の参加の下に懸案事項の討議を行なった。⁷⁰⁾

ここでの最大の課題は、この第2回大会の名称問題であった。ミリアは「IAAF総会」における議論の内容を報告するとともに、「IOC」はこの年の5月2～7日にリスボン市で行なわれた「第24回IOC総会」での議論を踏まえて「オリンピック」の形式は、「IOC」が唯一持つ権利であるとの理由で、この「大会」の名称から「オリンピック」の名を削除し「第2回女性競技大会（Second Ladies' World Games）」とするように迫ってきている問題について議論した。

結局、28年の「第9回アムステルダム五輪」から、「試験的」ではあってもオリンピックに5種目（100m・800m・400mR・走高跳・円盤投）、女性が出場できることとの取引のような形で「IOC」の主張をのみ、上記の名称に変更して行なうことに妥協した。

さらにこの「総会」では、①第2回大会で出た記録を含めて「世界記録」を公認する、②200m以下の短距離の記録は「メーター制」のみ公認する、③フィールド種目は「メーター制」で計測した記録のみ公認する、④800m以上を長距離種目とする、⑤やり・砲丸・円盤の重量を決定する、⑥次回大会以降の投てき種目は利き手による片手投げのみの競技とする、⑦競歩種目は公認種目から外す、⑧30年の「第3回大会」はチェコ・スロバキアで開催する、⑨3か国以上の参加のない大会は「国際大会」と認めない、⁷²⁾などを決定し、副会長にはフランスのエミール・アントワン氏（Emile M. Anthonie）を、イギリスの「WAAA」の設立に尽力したパーマー氏（Joe. Palmer）を名誉会員に選出した。⁷³⁾

ミリア会長らは、しかし、この暫定的な参加の方法の決定で十分とは思ってはならず、基本は「女性大会」等で行なっている10種目の「完全な」プログラムの採用を要求していた。ミリアは会長として「女性スポーツはオリンピックに登場するからといって最高の状況だといってもらっては困るのであって、現時点で“試験的”な状況で留まっていたはなりません。5種目という数少ない種目では女性スポーツの宣伝の助けにはならず、他方では男性種目と女性種目を共に行なう世界的な大会を考慮していくような道義をわきまえた疑問にこたえていかなければなりません」と厳しい発言をし、「IAAF総会」決議には議論の余地がある事も確認した。⁷⁴⁾また27年にはこの問題に関して「不幸にして私たちは指導者を持ちませんでした。男性のスポーツにかかわってきた男性は、女性のスポーツにわずかな関心を持つことで、結果的にはスポーツに貢献出来るということに気がつかないのです。女性のスポーツに関心を持たない男性は、いつまでも男のエゴイズムのなかに自らを閉ざしてしまうでしょう」と発言し、なお男性中心のスポーツ界に忠告

していることがわかる。⁷⁵⁾

さて、ミリアの主導で「FSFI」は、「第2回総会」の決議に基づき8月に「第2回女性競技大会」を開催する準備を整えてきた。しかし、大会前年の25年になってベルギー連盟の都合によって急遽会場の変更を余儀なくされたものの、24年に「国内女性競技連盟」を持っていたこと、会長のライル博士 (Dr. Einar Lilie) の献身的な努力、そして12年の「第5回ストックホルム五輪」開催時に尽力したバルック将軍 (General V. G. Balck) の援助、グスタフ・スエーデン国王 (H. M. King Gustavus) ら王室からのカップ寄贈などの支援があって、スエーデンのイエテボリ市において27日午後5時、白夜の競技場に50,000名の大観衆を集めて開会式を行ない、29日までの大会の開催に漕ぎつけた。⁷⁶⁾

この大会は、はじめて日本から単独参加した人見絹枝選手を含めて、10カ国 (ベルギー、チェコスロバキア、フランス、イギリス、イタリア、ラトビア、リトアニア、ポーランド、スエーデン、ユーゴスラビア)、92名の参加で開催され、60m以下全13種目中、6種目に大会新記録が出るなどして盛会裏に終了した。とくにこの大会には遠路日本から大阪毎日新聞社運動部長の木下東作博士、特派員とマネージャー兼ねた同社の黒田乙吉氏に引率されて参加した人見選手の活躍は目覚ましく、立幅跳と5m50の世界新記録を出した走幅跳の2種目に優勝したほかに、円盤投2位、100Y走3位など、出場した6種目すべてに6位以内入賞を果たして、閉会式で大会の「最優秀選手賞」をミリア会長から直接授与されたことは余りにも有名なことである。⁷⁷⁾

閉会式終了後の園芸協会のレストランにおけるパーティの席上では、ミリア会長は涙を流して「日本選手人見嬢の活躍が、どの位この大会に光彩を添えて呉れたたことか! 益々斯道に勉強されんこと望む」と祝福の挨拶をして、人見選手を感激させ、後刻に出版した自著『ゴールに入る』⁷⁸⁾ (一誠社: 1931) の写真頁の説明では「母」という表現でミリアのことを紹介している。⁷⁹⁾



(大会で人見選手に「最優秀選手賞」のカップを授与するミリア会長)
[『人見絹枝物語』小原敏彦著, 朝日文庫 (お8-1) p. 102]

10. 「第9回アムステルダム五輪」に女性陸上競技種目登場

26年の「第2回世界女性競技大会」終了とともにミリアの活動は止むことはなく、さらに28年の「第9回五輪」に向けて精力的な行動をとっているが、この間のミリアの足跡を時系列を追っ



（「第8回アムステルダム五輪」陸上競技場における審判員をつとめるミリア会長〔左端〕
 [[70 Golden Years IAAF 1912-1982] (Ed.) Jon V. Wigley IAAF 1982. p.27]



（28年8月6日～7日開催の「第9回IAAF総会」出席のミリア会長〔前列左から7人目〕
 [[70 Golden Years IAAF 1912-1982] (Ed.) Jon V. Wigley IAAF 1982. p.28]

て示した研究は、「アムステルダム大会への女子陸上競技採用決定直後のFSFIの主張—FSFIとIOCの往復書簡の検討から」（『体育学研究・第43巻第2号』（來田享子著 p. 91～101）の論文が詳しいので詳細は省略するが、とくにミリアは、女性の競技種目が「第9回五輪」で「試験的に」5種目が実施されたものの、それまでの交渉のなかで、27年1月4日付のミリアから「IOC」会長ラツール（Henri de Baillet Latour）に宛てた書簡で、①「FSFI」は「第9回アムステルダム五輪」における女性種目の採用経過に反対し、同連盟が指名する3名の委員からなる理事会が作成したプログラム案を提出する、②それが技術的な困難によって種目増加が不可能な場合は、32年の「第10回ロサンゼルス五輪」における女性の参加が連盟の理想に到達するよう、あらゆる手段をもって行動に乗り出す、③「第9回五輪」にはミリア会長が審判委員の一員となり、かつ「連盟」が各女性種目において1名の審判委員を選任する場合においてのみ採択される、④「第9回五輪」の陸上競技の印刷物には、国際委員会の会員として「FSFI」の名称を入れるよう、あらゆる努力を払う、⑤各国内五輪委員会は各国の女性連盟から1名ないし複数の委員を迎え入れ必



「父と母」の表題のついた人見選手の記念写真[左からミリア会長・人見選手・木下博士]
(『ゴールに入る』(人見絹枝著, 一誠社, 1931年2月, 写真頁))

要な活動を行なうこと, 等を要求するなど, それまでに積み重ねてきた女性の組織活動の実績を背景に, 「IOC」に対して厳しい要求を突きつけていることが明らかとなっている。⁸¹⁾「第9回五輪」は, 28年7月28日~8月12日にオランダ・アムステルダム市の西南海岸に新設された400mのアンツーカーの競技場で行なわれた。この大会における競技記録等の成績は各種の『報告書』が詳しいので, ここでは省略する。

11. 人見絹枝選手の見たミリア夫人像

1928年の「第9回五輪」に男性選手とともに日本から唯一の女性陸上競技選手として参加し, 800m競走に死闘を演じて2位に入賞して「銀メダル」を獲得した人見選手は, 大会翌年に著わした彼女の自著, 『スパイクの跡』(平凡社: 1929)⁸²⁾のなかで, ミリアについて26年のイエテボリにおける「第2回女性競技大会」において「最優秀選手賞」を直接手渡され, レセプション等で親しく声を掛けられて親近感を抱いていたこともあって, 「第9回五輪」を終了後, 早稲田大学の陸上選手たちの出場する「ユニバシアード大会」の見学とミリアに会うためにパリに移動してミリアに会った時の印象と会話の内容を, 以下のような表現で克明に記している。この人見の一文によれば, ミリアが最も活躍していた時, ミリアが世界の女性選手たちにどの様に接し, 女性の競技への思いがどのようなものであったかが手に取るように書き下されていて大変興味深いので, ここにその原文まま記すことにする。

「(前略)……ミリヨットの案内で或る日郊外のグラウンドに練習に出かけた事がありますが, 町から此の郊外のグラウンドに行く自動車の中で私はミリヨットに會ふ第一の用件に就いて色々話しかけたのです。

ミリヨット夫人の事に就いてこゝで少し書いて見ます。ミリヨット夫人は世界女子競技界の大立物であります。現在世界スポーツ聯盟の會長を勤めて居る。佛蘭西人としては普通の身長をもつ人であるが、五尺三寸ばかりの身長に十八・九貫と云ふ太く肥えた人で、まだ年も四十歳前後と見えます。中々きかぬ気の人でよく佛蘭西選手等を頭から大きな聲で叱りつけるのを聞きますが、そこが此の夫人のいゝ所でバリーの婦人に似合ず服装も至極質素です。どんな經歷を持つ夫人か知らないのは残念な事ですが、私等は夫人を呼んで『ミリヨットのおばあさん』と申して居ます。私や佛蘭西選手丈でなく、どの國の選手をもミリヨットは大切に可愛がつてくれます。特に私は瑞典でも、アムステルダムでも又バリーから歸つてのベルリンの競技會にも、競技會場でも、ホテルでも、常に目をかけて戴き、常に慈母のように私は慕つて居ります。

ミリヨット夫人は女子競技に對しては大なる抱負を持つて居り、コンミチーの席上でも男子を向ふにまはし會長とし又先輩として堂々たる意見を述べられると云ふ事です。オランダのオリムピックに女子八百米競走廢除の聲が高かつた時など、コンミチーの席から『女子の八百米疾走は苦しくて無理だと云ふが、あれはラドキ（獨逸の選手、八百米優勝者）と人見があんな接戦ををするから苦しいので、早く走れば苦しいし遅く走れば樂なのである。百米だつて同じ、二百米だつて同じことだ』と云つてのけたと云ふ事です。

然し徒らに急進的なのは違つて瑞典の萬國女子オリムピックの會議では『女子にウォーキングをさせると、あの不自然な歩行と手の振方によつて、女の體姿を崩してしまふと云ふので女子オリムピックから三千米ウォーキングを除外し、『二百五十米競走に於ては女子の體としてはスプリントで走り通す事は出来ないから、二百から三百迄の距離によるスプリントの種目は一切行はないことにしたい。四百米はスプリントでなくストライドで走るのだから差しつかない』と云はわれて、あの苦しい二百五十米を除去された。又圓盤、槍、鐵彈は各國內の競技では圓滿な女子の體を作る意味で兩手で投げるのが良いと云ふ意見を持つて居られる。之等を見て判るようにミリヨット夫人はあく迄慎重に女子の競技と云ふものを考へて居られます。

ミリヨット夫人の持つ女子競技に對する意見と、會長としての夫人はあく迄私等は信頼してゐると思つて居ます。私がアムステルダムの競技場で百米の豫戦當日、二年振りに顔を合すと夫人は早速私の手を取つて兩頬に接吻をされました。どの國の選手よりも日本からの私には何時も變らない親切を以つて對してくれるのでした。私は日本を出發する時、夫人に贈る土産物を色々探したが良いものがなく、三越製の銀製鎧（寶石入）を購つて、相當高價な錦繪を添へて持つて行つたのですがそれはミリヨット夫人は大變喜んでゐました。

今日私が何より云ひたかつたのは日本女子競技界の近況をミリヨットに知らせることもあつたが、それより女子オリムピックを日本に持つて來る事でした。昭和五年には第三回女子オリムピックがチエツクに開かれるが、その次昭和八年の第四回を日本の土地に持ち來る事でした。日本には現在いゝ選手は居ない。然し五年六年の將來には立派な選手も出るに定つて居る。競技場に就いても外國人に見せて恥しくないものがある。少し場所として日本は遠いけれども。かうした氣持ちで、出来る事なら是非日本で開きたいと云ふのでしたが、ミリヨット夫人は笑ひながらあの大きな體を一揺りされて『遠いから』と一言云はれる。私も負けずに先ずミリヨット夫人自身を日本に引張るに限ると思つて『來年でも、マダム、日本にいらしては』と云ふと『そうだ、行つてもいゝが、お金がないから』とカラカラと大きく笑はれる。『大したお金ではありませんよ、

日本から私等がお招きします」と云ふと、行つて見たいかと云はれるマダムにも幾分日本へ行つて見たいと云う氣持も窺はれるが、又一方日本と云へば恐ろしく遠くにあるものと一途に思ひつめてゐるらしい。ミリオット夫人の心を少しでも多く日本に引き付けて置くことは、近い將來日本でオリンピックを開く上に好都合と思ひ、色々と焦つて見たが、自動車の中ではなかなかうまく話せない。」

12. 「第9回五輪」以降、36年8月「FSFI」消滅までのミリアの役割とその後

ミリアを代表とする「FSFI」はその後、30年9月6日～8日にチェコスロバキア・プラハ市 (Prague) で「第3回」、34年8月9日～11日にイギリス・ロンドン市のホワイト・シティー競技場 (White City Stadium) で「第4回」の女性大会を主催し、32年の「第10回ロサンゼルス五輪」、36年の「第11回ベルリン五輪」にも世界から女性選手がするなどの積極的な活動を展開した。この間、女性の競技連盟としての「FSFI」が男性中心の「IOC」や「IAAF」と主導権を巡って演じた交渉・確執の詳細は、來田の別の論文、「国際女子スポーツ連盟の消滅と女子陸上競技組織の改編」(『体育史研究』No. 17, 2000年3月, p.45-59)⁸³⁾が時系列を追って追跡していて極めて詳しい。

來田は、冒頭で触れた Leigh の論文から「36年8月10～11日のベルリンのドイツ体育館における「第13回 IAAF 総会」の前に「FSFI」と「IAAF」は、①すでに「IAAF」に報告した女性の世界記録を公認すること、②「オリンピック大会」において10種目の女性競技の採用、③38年にウイーンで開催予定の「第5回国際女性競技大会」は「IAAF 総会」で審議することを条件に、34年のドイツ陸上競技連盟の提案を受入れ、合意したため、この「総会」では結局、「IAAF」が女性の陸上競技を完全に管理することに決定した。このことにより「FSFI」は、「女性の陸上競技の統括権を失った」と述べている⁸⁴⁾。さらに上記③の件についても「ヨーロッパ選手権大会」の女性の部として名義を変えて開くこととしたものの、結果的にこの大会も開かれなまま終わってしまった。「FSFI」は結局、「IAAF」や「IOC」への抗議行動としての「国際女性競技大会」の開催も不可能となり実質的に消滅したし、ミリア会長の活躍の場は終焉を迎えたのである⁸⁵⁾。

しかし、この間、ミリアは多彩な語学力を活かして欧州を中心として外交官にも増すスポーツ外交を展開したことは余りにも有名であり、彼女の性格と決断力によって「女性スポーツ」が大きく前進したことは紛れもない事実である。彼女と「IAAF」の委員会で女性の問題について共に仕事をした元「IOC」会長のブランデー氏 (Avery Brundage) は、「もし彼女が男性であれば彼女の努力はさらに有効に働いたと評価されていただろう」と述べていることからしても彼女の活動した成果の凄さが想像される⁸⁶⁾。

しかしその後、欧州は第二次世界大戦前の厳しい政治・軍事情勢となり、40年に開催予定の「第12回東京五輪」も、38年7月15日に日本が開催返上を決定する等、世界は戦雲急を告げ、もはや国際的な競技会が開催される状況にはなく、ミリアの出番は全く消失してしまったと云つて良い。さらにその後、彼女の国際舞台におけるスポーツ関係に費やした行動の様子の記述は、現在にいたってもほとんど見当たらず、大戦後、48年に復活した「第14回ロンドン五輪」以降の各五輪時に出席していたかどうか、またそれぞれの大会における役割についても不明であるなか、Guttman 氏が1957年に73歳で死亡したと記しているのが唯一の記録である⁸⁷⁾。

＜引用文献＞

- 1) Hargreaves J. A. (1994) 『Sporting Females — Critical Issues in the History and Sociology of Women's Sports —』 Routledge : New York, pp.1.
- 2) (Ed.) Howell Reet Ph. D. (1982) 『Her Story in Sport — A Historical Anthology of Women in Sports —』 Leisure Press ; New York.
- 3) Toohey K. & Veal A. J. (1999) 『The Olympic Games — A Social Science Perspective —』 CABI Pub. : New York, pp.162.
- 4) (Ed.) Kristensen K., Guttmann A. & Pfister G. (2001) 『International Encyclopedia of Women and Sports』 Macmillan Reference : USA pp. 1379 および Toohey K. & Veal A. J. *ibid.*, pp. 162-163.
- 5) 引用文献の10)～14)の論文など。
- 6) 來田享子 (2000) 『国際女子スポーツ連盟の消滅と女子陸上競技組織の改編—日本とイギリスの場合—』 『体育史研究 No. 17』 (日本体育学会体育史専門分科会) pp.46.
- 7) Toohey K. & Veal A. J. *ibid.*, pp.46.
- 8) 來田享子 *ibid.*, pp.45.
- 9) 5)に同じ。
- 10) Leigh M. H. & Bomin T. M. (1977) 『The Pioneering Role of Madame Alice Milliat and the FSFI in Establishing International Track and Field Competition for Women』 『Journal of Sport History Spring Vol. 4, No. 1, pp.72-83』.
- 11) Mitchel S. (1977) 『Women's Participation in Olympic Games 1900-1926』 『Journal of Sport History Spring Vol. 4, No. 1, pp.208-228』.
- 12) 萩原美代子 (1984) 『オリンピックと女子スポーツ』 『体育の科学 Vol. 34, No. 8, pp.585-591』
- 13) Guttmann A. (1991) 『Women's Sports — A History —』 Columbia Univ. Press : New York, pp. 163-171.
- 14) Quintillan G. (2000) 『Alice Milliat and the Women's Games』 『Olympic Journal XXVI-31, pp. 27-28』 IOC.
- 15) Guttmann A. (2001) 『Alice Million Milliat』 『International Encyclopedia of Women and Sports』 Macmillan Reference : USA (Ed.) Kristensen K., Guttmann A. & Pfister G. pp.743-744.
- 16) Guttmann A. (2001) 『Alice Million Milliat』 *ibid.*, pp.743.
- 17) Leigh M. H. & Bomin T. M. *ibid.*, pp. 74.
- 18) Leigh M. H. & Bomin T. M. *ibid.*, pp. 74.
- 19) Quintillan G. *ibid.*, pp.27.
- 20) Guttmann A. (1991) *ibid.*, pp. 165-166.
- 21) Leigh M. H. & Bomin T. M. *ibid.*, pp. 74, プラトン著, 森進一・池田美恵・賀来彰俊訳 (1976) 『法律 (プラトン全集 No. 13)』 岩波書店, pp. 466-477 および小坂修平 (1984) 『イラスト西洋哲学史』 宝島社 pp. 80.
- 22) Guttmann A. *ibid.*, pp.165.
- 23) Quintillan G. *ibid.*, pp.27.
- 24) Webster F. A. M. (1930) 『Athletics of Today for Women — History, Development & Training』 Frederik Warne & Co. Ltd. : London & New York, pp. 11.
- 25) Leigh M. H. & Bomin T. M. *ibid.*, pp. 75.
- 26) Leigh M. H. & Bomin T. M. *ibid.*, pp. 75. および Guttmann A. *ibid.*, pp.167.
- 27) Webster F. A. M. *ibid.*, pp.11.
- 28) Leigh M. H. & Bomin T. M. *ibid.*, pp. 75.
- 29) Guttmann A. (2001) 『Alice Million Milliat』 *ibid.*, pp.743 および Leigh M. H. & Bomin T. M.

- ibid., pp. 76.
- 30) Leigh M. H. & Bomin T. M. *ibid.*, pp. 76.
- 31) Webster F. A. M. *ibid.*, pp.11.
- 32) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 11-12.
- 33) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 22-23.
- 34) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 13-14.
- 35) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 14.
- 36) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 31.
- 37) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 33.
- 38) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 33-34.
- 39) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 15.
- 40) Tricarrrd L. M. (1985) 『American Women's Track and Field — A History, 1895 through 1980』 (McFarland. pp. 5-36).
- 41) Tricarrrd L. M. *ibid.*, pp. 60-71.
- 42) Tricarrrd L. M. *ibid.*, pp. 88~93 および (Ed.) Drinkwater B. L. (1984) 『Female Endurance Athletic』 Human Kinetics Pub. Illinois pp. 15.
- 43) 秋葉尋子 (1978) 『体育・スポーツの歴史 第9章』 日本体育社 pp. 144-145.
- 44) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 15 および Guttman A. *ibid.*, pp. 166.
- 45) Guttman A. (1991) *ibid.*, pp. 166-167.
- 46) Guttman A. (1991) *ibid.*, pp. 166.
- 47) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 31-33. および Guttman A. *ibid.*, pp. 166.
- 48) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 33.
- 49) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 33.
- 50) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 33. および Guttman A. *ibid.*, pp. 166.
- 51) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 35-36.
- 52) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 36.
- 53) Guttman A. (1991) *ibid.*, pp. 167.
- 54) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 36-38. および Guttman A. *ibid.*, pp. 167.
- 55) 来田享子 (1998) 『アムステルダム大会への女子陸上競技採用決定直後の FSFI の主張— FSFI と IOC の往復書簡の検討から—』 「体育学研究第43巻第2号」 日本体育学会 pp. 92.
- 56) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 39.
- 57) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 40-41.
- 58) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 41-42.
- 59) Tricarrrd L. M. *ibid.*, pp. 88-93.
- 60) (Ed.) Wigley (1982) 『70 Golden Years IAAF 1912-1982』 Marendaz Offset Couleurs : Lausanne pp. 24.
- 61) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 47-48.
- 62), 63) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 48.
- 64) (Ed.) Kristensen K., Guttman A. & Pfister G. (2001) 『International Encyclopedia of Women and Sports』 Macmillan Reference : USA, pp. 1368.
- 65) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 48-49.
- 66) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 23.
- 67) 雑誌 『アスレチックス1929年7月号巻7-7号』 (1929) pp. 2-3.
- 68) 拙著 (1994) 『近代女子陸上競技成立の過程—FSFI 設立を経て第9回アムステルダム五輪に女子陸上競技種目が登場するまで』 立命館文学第536号, pp. 83-125.

- 69) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 100-101.
- 70) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 78.
- 71) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 57.
- 72) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 78.
- 73) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 79.
- 74) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 101-102.
- 75) Quintillan G. *ibid.*, pp. 28.
- 76) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 61-77.
- 77) Webster F. A. M. *ibid.*, pp. 75-77. および Guttman A. *ibid.*, pp. 167-168.
- 78) 人見絹枝 (1929) 『スパイクの跡』平凡社, pp. 172.
- 79) 人見絹枝 『ゴールに入る』一誠社, 写真の頁。
- 80) 來田享子 (1998) *ibid.*, pp. 91-101.
- 81) 來田享子 (1998) *ibid.*, pp. 97-98.
- 82) 人見絹枝 (1929) 『スパイクの跡』平凡社, pp. 382-385.
- 83) 來田享子 (2000) 『国際女子スポーツ連盟の消滅と女子陸上競技組織の改編』 pp. 45-59.
- 84), 85) 來田享子 (2000) 『国際女子スポーツ連盟の消滅と女子陸上競技組織の改編』 pp. 49.
- 86) Leigh M. H. & Bomin T. M. *ibid.*, pp. 79.
- 87) Guttman A. 『Alice Million Milliat』 (2001), *ibid.*, pp. 743.